

### 母乳バンク

低温殺菌処理された安全な母乳を、早産児に提供する母乳バンクが、国内でも動き出した。命に関わる病気を減らすだけでなく、脳の発達を促進することも期待されている



群馬県立小児医療センターのNICU(新生児集中治療室)の母親は、保育室のそばや自宅で搾乳し、所定の置き場に届ける



### 母乳栄養の利点

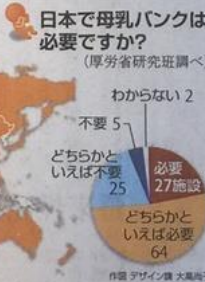
(人工乳との比較・早産児の場合)

- 消化・吸収機能を助ける
- 栄養の点滴が早くはされる
- 病気の予防(壊死性腸炎や重い感染症)
- 病気の重症化を防ぐ(早産児特有の目の病気)
- 脳の発達を促す

母親が病気で搾乳できなかつたり、必要な量が出なかつたりするケースも



低温殺菌処理の様子



群馬県立小児医療センター 第一内科部長の丸山憲一さんは、「整備は必要だが、医療者が『母乳が出なくてもバンクがあるから問題ない』と考えてしまつ心配もある。普及と同時に、早産児の母親への母乳育児支援もこれまで通りしっかり進めることが大切だ」と話している。

厚生労働省研究班が昨年7月、全国の新生児集中治療室(NICU)の医師に行つた調査では、7割以上が母乳バンクが必要と回答した。

「母乳をいたたけてよかった。とにかく無事に育ってほしいと、すぎる思いだった」

都内の会社員女性(40)は、そう振り返る。昨年12月、昭和東大豊洲病院(東

母親が病気で母乳を与えられなかったり、十分な母乳が出なかつたりする時に、別の女性の母乳を殺菌処理して提供する「母乳バンク」が国内でも誕生した。対象は、予定より早く小さく生まれた赤ちゃんで、主に命に関わる感染症などの病気の予防が目的だ。

(中島久美子)

## 「母乳バンク」日本にも誕生

東京都東区)で男児を出産した。予定より2か月以上早い妊婦8か月、緊急の帝王切開で、わずか1200グラムだった。翌日、病室に小児科医が訪ねてきて母乳バンクの説明を受け、提供を依頼した。

早産児は体の機能が未熟な状態で生まれるため、病気がかりやすい。母乳は、消化吸収を助け、腸の粘膜を保護する成分を含んでいるため、早産児へのメリットは大きい。腸への血流が滞って出血や炎症が起こる壊死性腸炎の発症が減る。栄養を補う点滴を早く外すことができ、膈から感染するリスクも減る。早産児を7〜8歳の時点で比較した調査では、脳の発達を促す効果が出て、約100年前から、医療機関や地域ごとの専門組織で母乳バンクが整備され、母親の母乳が十分与えられないケースに

効果が出ている。近年は、中国やアメリカにも広がっている。日本では取り組みが遅れていたが、同病院小児内科教授の水野克己さんが昨年9月から準備を進め、昨年9月、病院内に殺菌処理や保存の専用装置を備えた母乳バンクを作った。

これまで3人に提供。冒頭の男児は、生後3日から、母親自身の母乳も出始め、約2週間でバンクからの母乳

乳は不要になった。その後、順調に成長し、病気にもならず、今年3月上旬、退院できた。

早産児の割合は年々増えている。水野さんは、「母乳バンクの重要性を多くの人に理解してもらい普及させたい」と意欲を見せる。同病院の母乳バンクでは、提供者は、血液検査を受け、感染症がないことを確かめ、無償で提供された母乳は、ウイルスや細菌の感染が起きないように低温殺菌した上で、細菌が混入していないことを確認する。

生後7か月の長女に授乳中の主婦(42)も、昨年から提供者として登録、定期的に搾った母乳を届ける。母乳の出が良く、授乳後に搾らないと乳房が腫れて痛んだ。「提供できなかったら捨てるしかなかった。役に立ってれば、本当うれし」と話す。